

# 新書本における造本および主題の変容

—— 岩波新書を例に ——

今 村 成 夫

## 要旨

新書本のブームがつづいており、これまで新書本を発行していなかった出版社の新規参入やあたらしいシリーズの創刊もつづいている。一方で、若年層を中心に読書ばなれ、活字ばなれが指摘され、「文字・活字文化振興法」の制定や学校を中心に読書活動などの取り組みもおこなわれている。週刊誌や新聞などの逐次刊行物では、読者の読書力の低下へ対応するため、文字を大きくしたり、文字数を減らしたりといった対応もおこなわれているとされる。こうした中で新書本は以前と同様の造本、主題であるように感じられる。何らかの変化は起きていないのか。新書本というメディアの特性を理解するための調査の一環として、最も歴史的に古い新書本である岩波新書を対象に、造本（ページ数や文字数、サイズなど）および収録している主題の変化を調べた。岩波新書では、創刊以来、そうした造本や取り上げられる主題には大きな変化は認められなかった。

## 1. はじめに

近年、新書本の刊行がブームになっている。「新書総合目録 2007年版」<sup>1)</sup>によれば、2006年5月現在で新書の出版点数は現在出版中のものだけで13,307点にのぼる。これまで新書を手がけてこなかった出版社なども新規に新書を創刊しており、出版年鑑<sup>3)</sup>の第1巻、出版概況中の新書欄には、『前年に続いて、06年も新書の新規参入が止まらない。』と記しており、「ソフトバンク新書」(ソフトバンククリエイティブ)、「PHPビジネス新書」(PHP研究所)、「MYCOM新書」(毎日コミュニケーションズ)、「ゴルフダイジェスト新書」(ゴルフダイジェスト社)、「サイエンス・アイシリーズ」(ソフトバンククリエイティブ)、「朝日新書」(朝日新聞社)、「幻冬舎新書」(幻冬舎)など、複数の出版社が相次いで新書を創刊、しかも、各社とも創刊時から複数点を出版している。朝日新聞<sup>2)</sup>の報道によれば、2008年9月にもマガジンハウス文庫と小学館101新書が創刊されるなど、あたらしい新書本の創刊は現在もつづいている。こうした新書本の読者層は、従来からの読者層に加えて、ティーンエイジャーから30歳代までの若年層が増えており、TVニュースの報道によれば、大学生などの人気も高いとされている。現在の新書ブームについて、前出の「出版年鑑」<sup>3)</sup>の出版概況欄(新書)では、

『めまぐるしい社会環境の激変に晒され、人々はすぐに役立つ手軽な先端の知識を求めているともいえ

る出版現象であろうか。(中略)そこに見えてくるものは、出版不況を払拭したいという各出版社のコンテツの強みを生かしたあつい戦略だ。』

と記している。

新書本は、価格が廉価で、単行書にくらべてサイズも小さく、文庫本同様に携帯にも便利であり、総ページ数（つまりは総文字数）は単行書にくらべて少なく読みやすいことなどが特徴である。この特徴はまた、単行書にくらべタイムラグの少ない出版・流通が可能であり、そのために何かあたらしい主題、現代社会の課題など、社会が注目しているトピックに関する論述を公表する上でも有利なメディアであるといえよう。

実際、現在出版されている各社の新書本を見ると、社会のさまざまな事物・事象に関する主題がとりあげられ、各社から毎月多数の新刊が発表されているようにみえる。タイムラグという点で考えるならば、紙のメディアの中で、もっともタイムラグが少ないメディアは逐次刊行物、とりわけ雑誌や新聞であるが、新書本は、文庫本とならび、そうした雑誌や新聞の記事に次いでタイムラグが短いと考えられる。単行書と逐次刊行物の中間的な存在であるといえよう。

このように新書本はわれわれにとって大変なじみやすい図書であり、タイムラグが短いなどのすぐれた特長を有しているといえるが、形態的・数量的な特徴以外に、具体的にタイムラグはどの程度で、どのような主題やレベル、どのような“鮮度”の情報を、どの程度伝えるメディアであるのか。雑誌(逐次刊行物)や図書、文庫本、などの類似したメディアとくらべて、伝達される情報などに具体的にどのような相違があるのか。こうした事柄は明らかではなく、評論的な論述を除けば先行研究もみあたらない。現在、「新書本」というメディアの特性について、さまざまな側面から定量的・定性的な分析をすすめているところである。

ところで、近年、若年者を中心に活字ばなれ、読書ばなれが指摘されている。このため「文字・活字文化振興法」（平成 17 年 7 月 29 日公布 法律第九十一号）なども制定され、学校でも、社会でもさまざまな取り組みがおこなわれている。

毎日新聞主催の第 60 回毎日読書世論調査<sup>4)</sup>によれば、2006 年 5 月の 1 ヶ月間に一冊も読書をしなかった児童・生徒数は、小学生 6.0%、中学生 22.7%、高校生 50.2%、10 冊以上の読書をした児童・生徒数は、小学生 36.5%、中学生 5.3%、高校生 2.6%で、二極化を示している。とりわけ中学生以上での読書ばなれが顕著な状況にある。こうした傾向はすでに 10 年以上この読書世論調査で報告されつづけてきた。

香山リカ<sup>5)</sup>も、その著書「なぜ日本人は劣化したか」の中で、日本国民の国語力の低下を指摘している。そうした根拠として、新聞記事の文字数（すなわち情報量）が、文字の拡大化にともない過去 20 年間でおよそ三分の二程度に減っていること。それでも「新聞はむずかしすぎる」「読むのがたいへん」などの声が数多く寄せられている。しかも、そうした苦情は、高齢者ばかりではなく、若年層にも多い。そして、週刊誌などの大衆向け雑誌記事などでは、「ひと息 200 文字の時代」となっていて、これよりも長い文章は読者に嫌われる傾向にあり、こうした週刊誌などの記事を執筆する際、著者はひとときわ厳しい字数制限を受ける例が多いことなども例示している。

しかるに、そうした“読書ばなれ”の中で、上述のとおり新書本への人気は高まっており、従来から長

年親しんできた中高年齢層に加えて若年層も読者層に加わり、出版界では新書創刊ブームになっているとされる。これはどのような現象であろうか。読書ばなれと新書本ブームの間の関係はどのようなものであろうか。

新書本の低価格、携帯しやすさ、ボリュームの少ない点などからもたらされる手軽さ、そして、出版年鑑 2007 年版<sup>3)</sup>で述べられているような、「すぐに役立つ手軽な先端の知識」の収録の多さ、それらが要因となり、読者の多くの目が新書本へ向いているということは予想できる。しかし、手軽とはいえ、店頭で実際に新書を手にしてみるかぎり、そのボリュームは、どれも数百ページ程度はあるように感じられる。また、文字が大きくなっているようにはみえず、イラストが増えていたり、コミック形態に変わっている様子もうかがえない。タイトルからみられる主題も週刊誌のような手軽な印象ではない。香山<sup>5)</sup>が指摘するような、「ひと息 200 文字」に対応している週刊誌などの記事や新聞記事と同様、新書にも何らかの変化が生じてきているのであろうか？ 新書本というメディアの特性を理解する上で、こうした点についても検証してみる必要がある。

そこで本稿では、一連の新書本の特性に関する調査の一環として、新書本の主題や造本の特徴が、時代を通じてどのような変容がみられるかを、新書本の中でもっとも歴史がある「岩波新書」（岩波書店刊）を対象に検証を試みた。

## 2. 新書本発行の歴史的経緯

出版年鑑<sup>6)</sup>によれば、新書本では岩波新書がもっとも古く、1938 年（昭和 13 年）に最初のシリーズが創刊されている。それまでこうした規模の図書や叢書はみられなかった。そうした中での創刊のきっかけは、岩波書店の編集部スタッフであった、吉野源三郎（「岩波新書の 50 年」<sup>7)</sup>に収録）によれば、戦前の社会体制の変容の中でこうした新しいメディアの必要性を感じていたところへ、米国で「ペリカンブックス」と「ペンギンブックス」という小型の版の図書が相次いで発刊されたことが発案のきっかけになったという。

発刊の意図についてはまた、岩波書店の創始者である岩波茂雄による新書「発刊の辞」に記述がみられる。そこでは、「今茲に現代人の現代的教養を目的として岩波新書を刊行せんとする。」と記している。当時すでに刊行されていた文庫本（岩波文庫）とはまた異なる意図のもとで新書が創刊されている。

「岩波新書の 50 年」<sup>7)</sup>によれば、この年の刊行点数は 23 冊であった。その後 1941 年以降は戦局悪化による外因から刊行点数が減り、第二次世界大戦が終結した 1945 年から 1948 年までは刊行がおこなわれていない。これは、大戦前後の混乱や物資不足、さらには政府による事前検閲（のちに事後検閲）制度などの影響があったためという。そして 1949 年に 24 点に復活し、その後 1951 年まで 20 点台の発行がされている。そして、1952 年に 38 点となった後、以降 1987 年まで毎年 30 点台の主に後半での刊行がつついた。

岩波新書発刊の経緯については、上述とは別に「岩波新書の 50 年」<sup>7)</sup>の巻末に発刊の辞が記されており、そこに以下のような記述がみられる。（他の岩波新書にも同じ記述が掲載されているが、赤版、青版、黄

版……と新シリーズ刊行のたびに記述も改訂されている。)

岩波新書は、1938年11月に創刊された。(中略)創刊の辞は、道義の精神に則らない日本の行動を深憂し、権勢に媚び偏狭に傾く風潮と他を排撃する驕慢な思想を戒め、批判的精神と良心的行動に抛る文化日本の躍進を求めての出発であると謳っている。(中略)1977年、岩波新書は、青版から黄版へ再び装を改めた。(中略)より一層の課題をこの叢書に課し、閉塞を廃し、時代の精神を拓こうとする人々の要請に応えたいとする新たな意欲によるものであった。即ち、時代の様相は戦争直後とは全く一変し、国際的にも国内的にも大きな発展を遂げながらも、同時に混迷の度を深めて転換の時期を迎えたことを伝え、科学技術の発展と価値観の多元化は文明の意味が根本的に問い直される状況にあることを示していた。(中略)豊にして勁い人間性に基づく文化の創出こそは、岩波新書が、その歩んできた同時代の現実にあって一貫して希い、目標としてきたところである。(後略)

この発刊の辞から、岩波新書は、異なる分野相互の知識の交流のため、教養書あるいは啓蒙書として、各時代の社会における種々の課題や学問分野・領域の新旧の知識、社会の現状を探求し、広く伝達するメディアとしての役割期待のもとに創刊されたものであることがわかる。

その後、旧ソビエト連邦(現ロシア共和国)でスターリンが死去し、さらに朝鮮半島での戦争が終結するなど世界情勢の急激な変動により、戦後の混乱からようやく立ち直り成長を続けていた日本では、急激に経済的不況が顕著となった。出版界も不況下で経営は一般に困難になったとされる。「岩波新書の50年」<sup>7)</sup>によれば、そうした1952年頃から、軽装版や新書版などの叢書(シリーズもの)がブームとなった。光文社の「カッパブックス」は、1954年に創刊されている。「岩波新書の50年」<sup>7)</sup>には、『当時、軽装版・新書版のシリーズは93種類あるといわれた。出版界は一般的傾向として、大量生産による低価格志向が顕著になっていった。』と記述されている。

それからおよそ10年を経た1960年代前半に、あらたに中央公論社の「中公新書」、光文社の「カッパ・ビジネスシリーズ」、筑摩書房の「グリーンベルト・シリーズ」などが相次いで刊行され、各社の新書販売部数も増加している。

岩波新書は、その後も高度成長期の日本社会の中で活発に新刊発行が続き、すでに記したとおり、「岩波新書の50年」<sup>7)</sup>によれば、1987年(昭和62年)まで、毎年30～38件の新刊発行がおこなわれている。

1988年以降については、「出版年鑑」(1990年版～2007年版)によれば、岩波新書は毎年50点から四60点台が刊行された。そして、2005年頃より各社の新しい新書本創刊ラッシュが起り、以降現在まで続いている。「新書総合目録」<sup>1)</sup>によれば、2006年5月の時点で、73社が合計で13,307点(刊行中のもののみ)を出版している。

岩波新書の創刊、1952年頃の新書・軽装本発刊ブーム、1960年代前半の新書発刊ブームの原因は、日本社会の景気変動や社会体制の変容など、それぞれ社会システム中になんらかの変化が生じていることが要因となっているように見える。2000年代に突入してからの新書発刊ブームについては、活字ばなれ

や所得格差なども要因のひとつとも考えられる。いずれも読者からみて低価格で、携帯しやすく、文字数やページ数が少なく、気軽に読めて手ごろであることなども、人気が高まった理由であるものとみられる。

表 2.1. には、1938 年の創刊時から 60 年目を迎えた 1987 年までの岩波新書の刊行点数を示す。（「岩波新書の 50 年」<sup>7)</sup> の表を修正した。）また、表 2.2 には、国立国会図書館 OPAC (NDL-OPAC) にもとづき作成した、1988 年以降 2007 年までの同新書の刊行点数を示した。

表 2.1. 岩波新書の刊行点数 (1938～1987 年)

(出典：「岩波新書の 50 年」<sup>7)</sup> ただし、一部書式を手直した。)

年代	点数	年代	点数	年代	点数	年代	点数	年代	点数
1938	23	1948	0	1958	35	1968	36	1978	35
1939	31	1949	24	1959	35	1969	36	1979	37
1940	24	1950	29	1960	36	1970	36	1980	36
1941	6	1951	29	1961	35	1971	35	1981	36
1942	11	1952	38	1962	34	1972	36	1982	38
1943	1	1953	32	1963	36	1973	35	1983	36
1944	2	1954	37	1964	36	1974	36	1984	36
1945	0	1955	37	1965	36	1975	36	1985	37
1946	3	1956	36	1966	36	1976	37	1986	36
1947	0	1957	36	1967	48	1977	45	1987	36

表 2. 2. 岩波新書の刊行点数 (1989～2007)

(NDL-OPAC の検索結果にもとづく)

年代	点数	年代	点数	年代	点数	年代	点数	年代	点数
1988	55	1992	71	1996	61	2000	58	2004	56
1989	50	1993	83	1997	54	2001	60	2005	59
1990	53	1994	65	1998	66	2002	62	2006	65
1991	49	1995	75	1999	57	2003	58	2007	58

### 3. 岩波新書の出版状況の調査

#### 3.1. 岩波新書の造本状況

1938年の刊行から2007年までに刊行された「岩波新書」を対象に、そのサイズ、ページ数、縦書き、横書きの区別、1ページの文字数、および活字（フォント）のポイント数を調べた。なお、「岩波新書」を対象とした理由は、創刊が1938年でもっとも古く現在まで装丁などを意図的に大幅に変更せずに続刊しており、新書本の中で最も安定していて、読者層も比較的安定していると考えられるからである。

ページ数は、国立国会図書館 OPAC (NDL-OPAC) および、日外アソシエーツの BOOKPLUS で検索された書誌データを利用した。

版のサイズや縦書き、横書きの区別、1ページの文字数、活字のポイント数については、1938年（創刊年）、1940年、1950年、1955年、1960年、1965年、1970年、1975年、1980年、1985年、1990年、1995年、2000年、2005年、2007年に刊行されたものを対象に実測した。なお、1945年（第二次世界大戦終結時）は、刊行されていないため調査できなかった。

測定のため、各年10冊ずつを無作為に抽出した。版サイズは、実際に現物を物差しで測定した。文字数は1行の桁数と行数を数えた。活字のポイント数は、活字スケールを用いて測定した。

なお、各年代とも、それ以前の年代に刊行された資料の改訂版なども発行されているが、これらもその年代の実情に合わせて加筆訂正された原稿にもとづき、新たに発行しているものであるため、その年が初版のものと同様に扱った。

#### 3.2. 岩波新書の主題範囲の調査

上記3.1節と同様、1938年（創刊年）、1940年、1950年、1955年、1960年、1965年、1970年、1975年、1980年、1985年、1990年、1995年、2000年、2005年、2007年のそれぞれの年に刊行された岩波新書全巻について、国立国会図書館 OPAC (NDL-OPAC) および、日外アソシエーツの BOOKPLUS で検索された書誌データをより所として、とりあげている主題の種類とその度数をしらべた。

主題の種類は、NDL-OPAC や BOOKPLUS 上で各資料に付与されている日本十進分類法 (NDC) の分類記号をしらべ、类目（第一次区分）ごとに集計した。なお、1945年（第二次世界大戦終結時）は、刊行されていないため調査できなかった。

## 六 4. 岩波新書の出版状況

#### 4.1. 岩波新書の造本状況

「岩波新書」の発刊点数は、すでに2節で述べたとおり、創刊時に1938年から1987年まで、毎年30～38件の新刊発行がおこなわれている。1988年以降については、毎年50点から60点台が刊行されている。新書ブームであった1952年、1960年代初頭、および2005年以降も、発刊点数に大きな変化はみられない。一方、1995年の発刊点数は、75点と、発刊点数が今回調査した年の中では、一番多い。

「岩波新書」のサイズは、創刊された1938年版から最新版（2008新刊）まで一貫して変化しておらず、縦17.5 cm、幅10.5 cmであった。

文字の大きさについても、創刊された1938年版から最新版（2008新刊）まで一貫して変化しておらず、10ポイントであった。

縦書きと横書きの区別は、岩波新書ではほとんどは縦書きであったが、1972年以降の刊行物の中に横書きがみられる。縦書きと横書きの比率は全期の全巻を対象とする調査をまだおこなっていないため明らかではない。また、多くが縦書きである中で、一部を横書きとした理由についても、今回の調査では明確にできなかった。しかし、数学など数式が多くみられるものの中に横書きが多いようである。

文字数については、縦書きでは、1行の文字数は42文字で、行数は資料により14行から17行の間で割り付けられており、このうち15行と16行の巻が36%程度であった。横書きの巻については、おおよそ1行30文字で、28行程度に割り付けられているが、巻によって変動が大きかった。

ページ数は、表4.1のとおり、全期間を通じて平均220.5ページでほぼ一定であった。

表4.1 岩波新書の本文ページ数の平均値

発行年	ページ数平均	発行年	ページ数平均
1938	221.4	1980	212.1
1940	197.1	1985	215.4
1950	248.0	1990	226.8
1955	225.8	1995	226.7
1960	221.0	2000	220.6
1965	211.1	2005	220.7
1970	215.0	2007	223.5
1975	217.3	平均	220.5

#### 4.2. 岩波新書の主題範囲

各発行年の岩波新書が収録している主題の範囲は、表4.2のとおりである。

各発行年を通じて、1類（哲学、論理学、倫理学、宗教、心理学）、2類（歴史、伝記、地理、地誌、紀行）、3類（社会科学全般）、4類（自然科学・医学全般）、および9類（文学全般）の主題の資料が多い。3類は、1990年以降に刊行点数が増えている。

5類（技術・工学全般）、6類（産業全般）は、全般に少ないが、1970年代後半から増加を始めている。主題（類）の間の比率は、上述のとおり自然科学・技術・産業系統が70年ごろより増加を示している点を除けば、創刊時と大きな変化はみられなかった。

## 5. 岩波新書の造本および主題の年代による変容

岩波新書の造本や主題分野は、1938年の創刊以降、2007年に至るまでに大きな変化はみとめられなかった。

発刊点数は、第二次世界大戦の終結前後の期間に点数が少なくなり、終戦直後は発刊がおこなわれていない期間もあるが、こうした期間をのぞけば、創刊以来、経済の成長や社会の成長、学術領域の発展に呼応するように増加を示している。しかし一次関数的な増加ではなく、創刊時から1950年頃まで、1951年から1987年頃まで、1988年頃以降と、3つの期間の中でそれぞれほぼ同数の発刊を続けてきている。新書ブームに乗るように年間の発刊点数が急に増加する、といった変化はとくにみられない。

造本自体は、創刊以来、赤版、青版、黄版、新赤版……と装丁は若干変化していることや、一部横書きの版がみられるものの、寸法も総ページ数も、各ページの文字数や行数、フォントなどにもとくに変化は認められなかった。巻ごとの行数の多少の増減は、総ページ数をほぼ同じに揃えることが目的と思われる。

主題分野については、1970年代後半以降に自然科学や技術、産業関連の主題の資料が増加している点を除けば、こちらも変化はとくに認められない。書誌データに付与された日本十進分類法（NDC）の分類記号を整理してみると、同新書は社会科学、人文科学分野の主題を中心に取上げた新書本であり、そうした傾向は創刊時から2004年に至るまで変わっていないことがはっきりした。なお、1980年代までは、8類の言語関連の主題など、とりあげられていない区分もみられるが、1990年代以降は、あらゆる主題を取り上げている。2類（歴史、伝記、地理、地誌、紀行）、3類（社会科学全般）は創刊当時から他の主題分野よりも発刊点数がとくに多い。また、4類（自然科学、医学）も、2類や3類に次いで発刊点数が多い。

主題（内容）の難易レベル、文章表現の難易レベル、漢字の種類や数などについては、今回調査をおこなっていないため、まだはっきりせず、今後の調査が待たれるが、今回の結果からわかる範囲では、岩波新書は、社会の活字ばなれ、読書ばなれ、新書ブーム、といった現象による編集方針への影響はみられなかった。

第2章で引用した、岩波新書発刊の辞に謳われた、教養書あるいは啓蒙書として、各時代の社会における種々の課題や学問分野・領域の新旧の知識、社会の現状を、広く探求し伝達するメディアとしての役割を現在も継承しているものであろう。

## 八 6. おわりに

今後は、岩波新書を対象に主題（内容）面の難易度、文章表現の難易度、漢字の種類や数などを調べるとともに、岩波新書の創刊以降、戦後になって創刊された他の新書本、とりわけ近年創刊された新書本に対しても同様の調査をおこないたい。また、読者層についても調査をおこないたい。

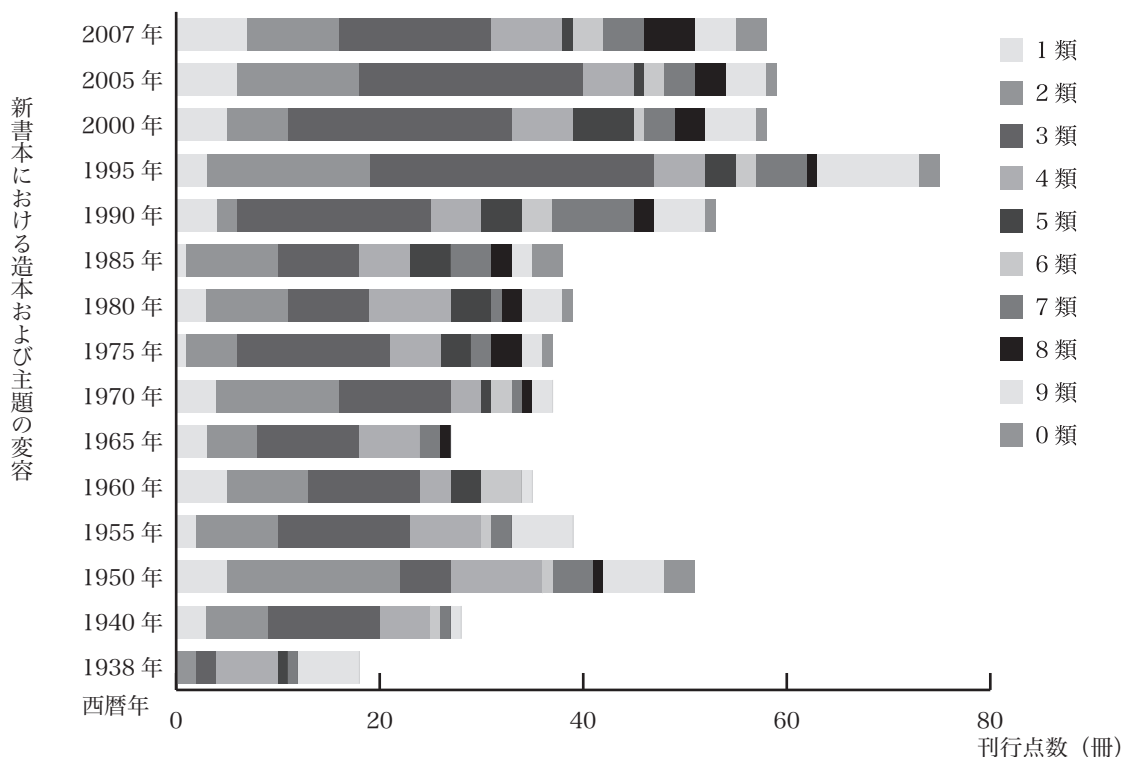


表 4.2 岩波新書の年別・主題別刊行点数一覧（単位：冊）

NDC 類 / 発行年	1938	1940	1950	1955	1960	1965	1970	1975
1 類	0	3	5	2	5	3	4	1
2 類	2	6	17	8	8	5	12	5
3 類	2	11	5	13	11	10	11	15
4 類	6	5	9	7	3	6	3	5
5 類	1	0	0	0	3	0	1	3
6 類	0	1	1	1	4	0	2	0
7 類	1	1	4	2	0	2	1	2
8 類	0	0	1	0	0	1	1	3
9 類	6	1	6	6	1	0	2	2
0 類	0	0	3	0	0	0	0	1

NDC 類 / 発行年	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2007	
1 類	3	1	4	3	5	6	7	
2 類	8	9	2	16	6	12	9	
3 類	8	8	19	28	22	22	15	
4 類	8	5	5	5	6	5	7	
5 類	4	4	4	3	6	1	1	
6 類	0	0	3	2	1	2	3	
7 類	1	4	8	5	3	3	4	
8 類	2	2	2	1	3	3	5	
9 類	4	2	5	10	5	4	4	
0 類	1	3	1	2	1	1	3	

図 4.2 岩波新書の年別・主題別刊行点数 (表 4. 2 をグラフ化したもの)



引用文献・参考文献

- 1) 「新書総合目録： 2007年版」. 新書総合目録刊行会, 2006.
- 2) “情報ファインダー” 「朝日新聞 2008年9月14日 朝刊」. 読書3面, p. 13, 朝日新聞社, 2008.
- 3) 「出版年鑑： 2007年版」 出版ニュース社, 2007
- 4) 「毎日新聞読書世論調査 2007年版」. 毎日新聞東京本社, 2007.
- 5) 「なぜ日本人は劣化したか」. 香山リカ. 講談社, 2007 (講談社現代新書; 1889)
- 6) 「出版年鑑 昭和14 - 16年版」. 東京堂年鑑編集部. 東京堂, 昭和14-16
- 7) 「岩波新書の50年」. 岩波書店編集部編. 岩波書店, 1988 (岩波新書; 別冊)
- 8) 「大学図書館と新書本」. 吉田昭. 大学図書館研究, v. 38, 1991.
- 9) 「圧倒的に多い文庫本利用 (学校図書館の外側にあるもの: 本・新書本・マンガ・etc.)」. 特集: 学校図書館の外側にあるもの. 安光哲来. 学校図書館, v.323, p.26-28, 1977.
- 10) 「利用の多い文庫本 (学校図書館の外側にあるもの: 本・新書本・マンガ・etc.)」. 特集: 学校図書館の外側にあるもの. 細山田文樹. 学校図書館, v.323, p.32, 1977.